

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

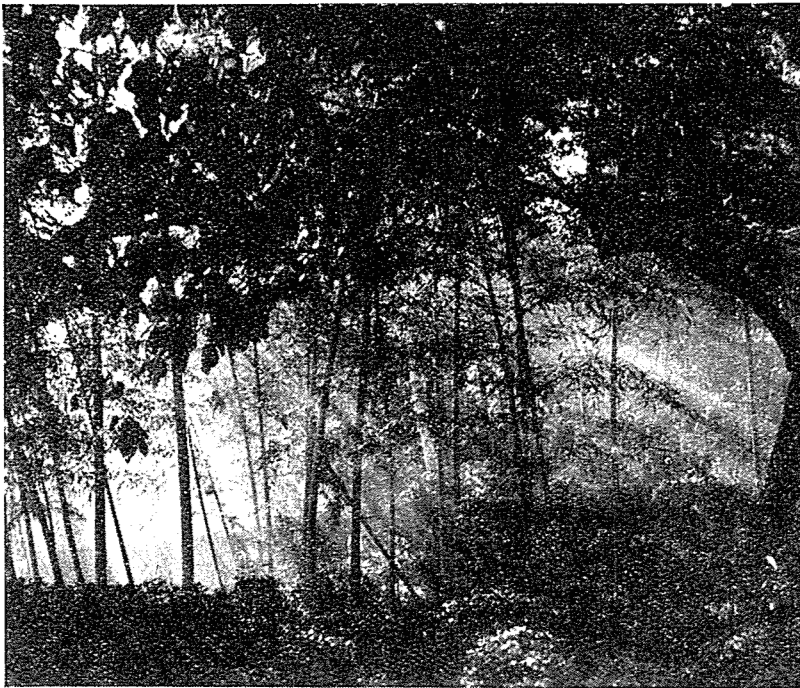
Osaka, January th,15 1953. No. 255

# 關西大學學報

第 2 5 5 号

昭和 28 年 1 月

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
復刊第二五号(通卷第二五五号)  
昭和二十八年一月十五日發行(每月一回十五日發行)



關西大學學報局

## 昭和二十八年を迎へて

関西大学学長 岡野留次郎

茲に昭和二十八年新春を迎へるにあたりまして、本学関係者各位に対し、謹んでその御健康を祝すると共に、わが関西大学の校運の年と共にいやさかゆかんことを祈念する次第であります。

顧みますれば、わが学園も終戦後数年の間に、俄にその面目を一新した感があります。殊に新制移行後の発展振りには、慥に瞠目に値するものがあり、専門部或は旧制学部時代に卒業せられた校友の各位におかれましては、今日白雲の美装をこらした学舎の立並ぶ千里山学園を瞥見せられ、恐らく今昔の感に堪えないものがあられることと御推察いたす次第であります。これ全く過去の傳統と歴史の累積の上に、新しい時代の要望が本学に負荷せる期待の加つた結果でなければならぬと思はれるのであります。各位と共に本学の隆昌を祝し、喜びを分かち合ふと同時に、過去における本学先覚者の徳を偲び讃えんと共に、本学の発展に対し現在の関係者各位の一層の御協力御盡瘁を切に要望申上げる次第であります。

さて国家興隆の本は教育にあり、人類文化の進歩発展亦教育に基くといふことは、何人も信じこれを容易に口にすることはありますが、

いざ実行といふことになれば、為政者を初めとし、各層の指導階級が、眼前の實利実効に走つて、百年の大計を忘れるのが常であります。今般中央教育審議会が設けられ、各界は指導者が選ばれてわが国教育の基本方針を論議されるようではありますが、希くは廣く各層の第一線に働く有識者の意見を徴し苟も偏狭な空論に終らないことを望むや切であります。今日の教育においては、最早や単なる理論の傳達の時代は去つたと思ひます。実践の裏付けを伴ふ理論の傳達こそ、現代の切実に要望する教育でありませう。又教育は生きた人格と人格との間に成立する関係であり、両者の間に成立する指導関係を除いて教育の本質はあり得ないのであつて、物的施設の如きは、飽くまで教育に取つて第二義的のものに過ぎないのであります。この意味において、私は一方本学園新校舎の整備充実を喜ぶと共に、他面本学における教育精神の昂揚を叫ばなければならぬと思ふのであります。わが学園も徒らに外観の美に幻惑されず、学園に漲るべき真理攻学の精神を失ひ、權勢や利慾に迷うて教育精神を没却するようなことが、仮りに聊かでもありますならば、わが学園は真理探求の殿堂たる本質を失ひ、顛落への一步をあゆむものと覚悟しなければならぬでありませう。

私はこの新春の首途にあたり、本学関係者各位と共にわが学園のよき傳統を守り、更に輝かしい新歴史の一頁を創造すべく、心に深く誓ふものであります。

# 開国百年記念に際して

—アメリカ極東政策一世紀の史的展望—

横 田 健 一

歴史的意義を考察してもつて現代の日米關係・米國極東政策に及びたいと思ふ。

一八五三年七月八日（日本暦嘉永六年六月三日）午後五時アメリカ大統領ミラード・フィルモアより日本に派遣された特使ペリリ提督（Commodore Matthew C. Perry）は旗艦サスケハノン号他三隻の軍艦を率いてわが浦賀に入港投錨した。折しも天候快く晴れわたり群峯を従えた富士の秀峯はくつきりとその姿をあらはしたといふ。

彼のもたらした国書は直ちに幕府の受け入れることならず、ペリリは一旦去り、翌安政元年正月再び彼は七艦を率いて来り幕府の再考を促した。かくて三月遂に神奈川和親条約は結ばれ、日本は二百十五年に亘る鎖国をとき、国を開いた。本年はペリリ来航より滿百年、開国より足かけ百年にあたる。こゝに一世紀間の日米を中心とする世界史の様相を展望する時、その変転の激しきこと誠に目ざましく、感慨なきこと能はざらしめるものがある。こゝに一世紀間のアメリカ極東政策史を展望し、ペリリ日本遠征の

ペリリ来朝の理由は国書にある如く、通商の為カリフォルニアより中国に赴く米船、北太平洋の捕鯨船等に中継の燃料食料の補給地を設定し、難破民の保護を我に求め、かつ通商を欲したことにあ

る。かゝる通商の要望は他の列強にも存し、すでにそれ以前に、米、英、露等の艦船は頻々と来航し又測量等を施し或は暴行を働くものがあつた。ペリリ来朝より遅ること月余ロシア海軍大將プーチヤーチンも亦四艦を率い長崎に來り通商を求めている。

これはルネサンス以後歐人の植民地開拓、重商主義的富國政策に引続き、特に十八世紀末の産業革命後資本主義の発展が、列強をして愈々市場、植民地獲得熱を促した結果であること今更いふ迄もない。アメリカはその点建國が近々一七七六年の事に過ぎず、国家中心は東部にあつたが、一八四六年より四八年メキシコと戦つてカリフォルニアを得た。しかもその直後金鉱が発見され、有名なるゴールド

ドラッシュニエ時代、西部開拓時代を迎へた。中国貿易や太平洋捕鯨等はそれ以前より行はれていたにせよ、カリフォルニア獲得がアメリカをして太平洋への進出を著しく促したことは当然であらう。ペリリ来航はその進出の第一歩であつた。しかしアメリカの太平洋における顯著な進出は十九世紀末以後のことである。十九世紀末迄のアメリカの極東政策はそれ以後と著しく異なる。それ迄は消極的であり、従つてアメリカの國際的地位からいへば今日みる如き第一流の強國としては活躍しなかつた。何が然らしめたのか。

## 二

およそ近代の強國の性格を顧るに、ルネサンス以後十九世紀に至る列強は概ねその面積や人口において中等度の大きなないしは小國とすらいひ得るものである。すなはち初期のスペイン、ポルトガル、それについてオランダ、イギリス、フランスであり、十九世紀にはザイクトリア朝のイギリスが制覇した。これら列強は概ね植民地獲得開発と貿易とによつて富強となり、従つて海軍及び商船隊建設によりこれを達成した。政治的には小國なることによつて封建的的分権を逸早くも脱却し絶対主義王權下に統一を完結した。しかも貿易その他により市民階級の擡頭、自覚により高度な統一と機構をやく実現した國が近代後期の列強た

り得た。封建制の根強い國は立遅れた。しかし第二次大戦はかゝる中等度の大きな強國を転落せしめた。代るものは面積、人口、資源共に量的に大國であるアメリカ、ソ連のみが完全な獨立國であり、第一流強國となつた。これに次がんとするものは同条件を潜在せしめる中共である。かゝる轉換は過去一世紀の間に着々と進行した。その原因は何か。それは大國は強力たり得る条件を潜在せしめ乍らも顯在化せしめるに多大の時間とエネルギーを要する。それは大陸上國家では交通機關の未発達の間は開發は不能若くは著しく緩慢にしか行はれぬ。しかし交通機關が大量を運び得るに至時、その開發は進む。その開發が国内に向してある時、その大陸上國は、他の中小海國の如く海上に進出しない。アメリカは建國後国内建設に一世紀以上を要した。ソ連は革命後三十六年間に国内向的建設を繼續してきた。しかしもし建設開發が行はれ、外向的政策に轉換したばあひ、もはや中小國は大刀打できない。ことに異民族の植民地に依存してゐる中小の國々は異民族の自覚、脱離が行はれる時転落せざるを得ぬ。アメリカ合衆國の建設は南北戦争（一八一—一五）による近代的統一後巨歩を進めた。ペリリ遠征は、アメリカの太平洋への外向的の第一歩であるにせよ、對極東政策に積極性が認められなかつたのは、国内開發の性格、資本主義

發展の段階からいつて然るべきことであつた。

十九世紀後半アメリカ合衆国の内向的建設の間にヨーロッパ列強は国内建設統一を完成し、帝國主義的對外進出に移り、アフリカ、アジアの分割に熱中してゐた。しかしアメリカの對外政策には帝國主義的の性格は稀薄であつた。ペルリの場合にみられる如く、後進弱小の日本に對する態度はその直前イギリスの中國に對してアヘン戦争を行つた酷烈な態度と全く異なる。またその後にもなく英仏等が、中國、仏印、インド、ペルシア、アフリカ等であつた態度とは異つてゐる。もちろんペルリは自らその遠征記中でいつてゐる如く、日本に威嚇を以て臨み、万一場合によつては武力を用いる決心はしてゐた。しかし友好的な温和な態度を基調としたことは日本にとつて有難かつた。アメリカはその建國傳統である民主主義的自由主義の態度を保持し、特に外交政策にはモンロー主義を國是としてゐた。これは勿論對ヨーロッパの原則であるにしても他大陸への積極的干渉侵略をアメリカ經濟機構は未だ必要として居らなかつた。ここに日本の開國の初期より明治中葉の建設完了迄の幼弱期に、隣國アメリカの友好的態度は日本人の大いに感謝したところであつた。そうした友好的交渉は日露戦争までつゞいた。

### 三

日露戦争後の日米交渉史は太平洋戦争に至るまで、もちろん友好的な關係も間々なかつたわけではないが、對立的關係となり、次第に緊張の度を加へ、滿洲事變（一九三一年）以後頓に悪化し、大戦勃発となつた。わが敗戦後は再び友好期に入つたとしてよいであらう。しかし何が初期の友好關係を對立關係へと轉換せしめたのであるか。ここにアメリカの外交特に極東政策が十九世紀末に一大轉換を來し、積極化したことを見逃し得ない。それはモンロー主義に代つて極東においては門戶開放主義を外交原則として打樹つたことである。この主義が國務長官ヘイによつて各國に通達された一八九八年こそはまたアメリカがハワイを併合し、またスペインと戦つてキューバ、ポルトリコ、フィリピン等を領有した年である。ヘイの通牒それ自体は帝國主義的なものといふよりも、むしろ、日清戦後三國干渉をはじめとする露、獨、英、仏等の諸國の露骨かつ積極的な中國分割を進められることを防止せんとするものであつた。それは中國の領土、主權保全を目的とした。しかしそれに併せて門戶開放、機會均等の要求は將來的可能性を持つ貿易市場、投資市場としての中國へ列強を阻止しつゝ割込む意圖を孕むものであつた。アメリカのアジアに對する積極

化への轉換である。それは列強の帝國主義と多少趣を異にしたが（尤もアメリカの帝國主義策としては粵漢鐵道敷設權獲得、福建省三沙灣貯炭根拠地獲得運動などある）、いずれにせよかかる態度はアメリカ資本主義の成熟が独占段階に達し、その資本の帝國主義的進出を要請し始めてゐた兆候である。ハワイ、フィリピンの領有がアジアへ積極化する恰好の足場であり、太平洋への進出がこれ以後始まる機縁となつたこといふ迄もない。大統領マツキンレー、次を受けたセオドア、ローズヴェルトらが帝國主義的政綱をすゝめ、海軍を擴張し、その下にマハンの如き海上權擴張論者もあつた。かゝるアメリカにとつて日露戦争に勝つて極東大陸に西太平洋に制覇した日本の勢力が面白からぬ存在となることは当然である。それは單に日米の勢力が接觸するに至つたのみでなく、日本が滿鮮において優越的利權を保つことは門戶開放主義にふれるからである。

日本は韓國を併合し（一九〇九年）次で一大帝國主義的失敗を演じた。それは滿洲、山東等の利權保持域を圍つた二十一条の要求（一九一五年）を中國になしたことである。辛亥革命（一九一一年）を行つた中華民國は昔日の易々諾々と列強の無理な注文を聞いた清朝とは全く面目を異にする國家となつてゐたことを日本は氣付かなかつた。この革命こそはわが明治維新と同じく、民族自覺に基く近代民族統一國家を建設せんとする民主主義革命であり、列強の植民地化から脱却せんとする中國人の正當な進展の歩を進めたものである。アメリカがこれを支援したことは當然かつ正當であつたが、日本がこれを妨害したこと、しかも利權を拡大せんと要求したことは歴史の必然の動きに逆行した誤謬であつた。この革命を飽迄も遂行し、近代的建設を遂行せんとした國民黨、蔣介石の事業を妨害し、これと戦うに至つたことは近代日本の最大誤謬であつた。それは中國民族全体を敵としたのである。日本は従つて中國を助けるアメリカと強い對立に陥つた。山東問題はワシントン會議（一九二一年）で解決し、海軍擴張競争もある程度この會議及び以後の軍縮會議で解決した。しかし九ヶ國條約は門戶開放主義を確認し、アメリカの極東政策の原則は國際公法の裏付を得た。アメリカ外交の勝利であつた。日本の太平洋戦争惹起の非合法性がこの九ヶ國條約侵犯にあるとされることは注意すべきである。

### 四

日米の對立の原因は種々な要素がある。感情的要素も見逃しえない。人種的偏見それに伴ふ移民法案などもそれである。またアメリカは古くより中國の巨大な人口から貿易の前途の可能性に過大な

期待をかけてゐた。それは必ずしも不当とはいへぬ迄も、現実には、日米の貿易額は戦前常に米支間のそれを遙かに凌駕してゐたこと、グリスウォールドの指摘する如くである。(米國極東政策史) アメリカはかく現実よりも可能性を重んじてゐた。また前駐ソ大使ケナンがいふ如く門戸開放主義の如き抽象的原則を重んじ、日本の如き他國民の死活問題(例へば滿洲)に同情、理解がなく感情的に中国を同情し、日本を憎んでゐたこともあらう。(アメリカ外交五十年) また日米戦争はフランクリン、ローズヴェルトが日本を挑発したのだとするアメリカ歴史家(ヒアード)自身の批判もある。かゝる論議は今日アメリカ人がその対日外交の失敗面として反省してみたところで今日如何ともしがたい。一方日本の国内事情の發展また中国民族の國家統一の爲の排日運動等よりして、必然の動きを歩んでゐた面があつた。それは良識ある政治家が各国に出現してゐた場合に或は衝突を延し得たかもしれぬが、結局は避けがたい必然性を持つてゐたやうに今日顧みて感ぜられる。

イギリスの知名な哲學者バートランド・ラッセル(Bertrand Russell)はすでに早く一九二二年に日米戦争を予言し、その必然性の所以を正確に指摘してゐる。(The Problem of China, pp. 113-6, 172-4) 要をこゝば日本の過剩人口を

養ふ爲には、日本は工業化を促進せねばならず、その爲には中国の原料支配を必要とし、それは欧米との対立を招く。これに対処する爲日本は軍拡を必要とし、その経費は貧窮者の貧窮を招き、社会主義化、ひいては國体の解体を招く。対外的にはアメリカと戦ひ、中国の反抗を受け、国内的にはプロレタリア革命の危険を持つといふ。彼は日米戦争は十年続き日本が敗るとした。戦後、日本は自由な國となり、アメリカは全世界に対する軍國主義的帝國主義を開始するであらうといつてゐる点も現状と比較して興味がある。とに角ラッセルの予言後二十余年をへてその通りになつてしまつた。

戦後アメリカの極東政策は従来に比を見ぬほど積極化した。そのヨーロッパ第一主義は動かぬにせよ、アジアは著しく重要視されるに至つた。それはアメリカが多額の犠牲を払つた戦果を守らんとするといふよりも、ソ連を中心とする共産主義諸國との対立に基くこといふまでもない。一面にはアメリカが日本を破ることによつて、日本の極東に負うてゐた負担を引つくだといへるであらう(ケナン)。それは具体的にアメリカ資本主義が繁栄を維持する爲にはヨーロッパのみならず日本を含むアジアの協力を是非とも必要とするからであり、また国防戦略上からも、極東が国防の第一線となるからである。武器と戦略の進展が然らしめ

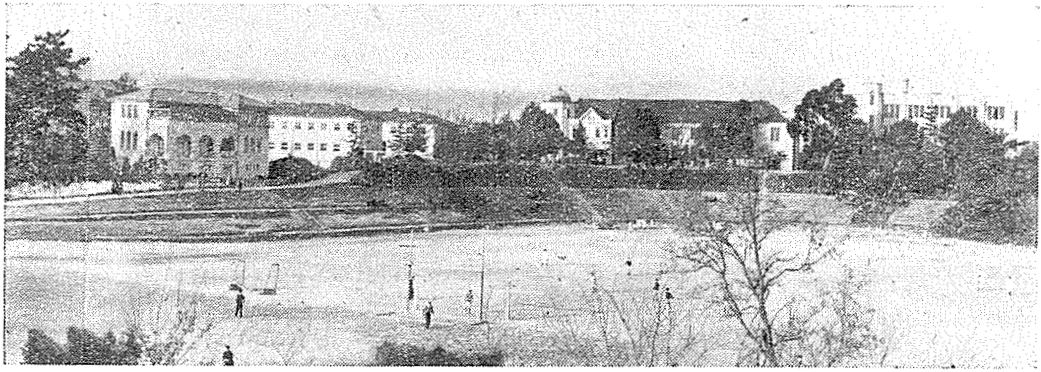
たのである。資本主義經濟機構の發展は西歐國の拡大繁栄と運命を共にする。それは共産主義國との死闘を必然とする。曾て日露戦後、日米の勢力範圍の接觸、対立は同質的機構を持つもの間の対立であつた。今や、アメリカとソ連とは極東において勢力範圍を接するに至つた。そこには單なる社會經濟機構以上の対立闘争がある。民族は統一を要望するにも拘らず、この異質の二大強國の勢力範圍が朝鮮半島の三十八度線で境され、朝鮮統一が実現されないこと、これ以上の悲劇はない。ここには兩國のイデオロギーや社會機構の良否について論ずる積りはない。問題はもつと複雑であり、極東の諸民族、諸國家によつてそれぞれの事情を大いに異にしてゐる。これに対処するアメリカ戦後の極東政策史又占領政策を批判し、その將來について考へることは到底紙面なき今なし得るところではない。しかしアジア全体の問題につき一二の点を指摘して置きたいと思ふ。

## 五

先ず戦後アメリカ極東政策の大失敗は中国に關していへるであらう。莫大な援助を與へた國民黨政權はあへなく崩壞して台湾に後退し、中共政權が成立した。アメリカは中共を非認し、また侵略者として敵視する政策をとる。私にはアメリカがその間の歴史的事情につき理解を欠いてゐるやうに思はれる。すでにアメ

リカの最もすぐれた中国通の一人オウエン・ラティモア教授は戦争末期に書いた Solution in Asia, 1945, に於いて、國民黨政權が中国民衆の支持を失ひ、中共が民衆支持を得、より民主的な勢力として出現し來つた過程を見事に分析してゐる。(pp. 104-110) 國民黨は大地主とブルジョア及び官僚等の聯合勢力のバランスの上に立つてゐたが、先ず農民の支持が失はれ、ブルジョアが離れ、官僚と地主の勢力が優越しバランスが敗れ腐敗した。國民黨は清朝に比しては民主的ブルジョア政權であり、アメリカがこれを支持したことは中国民族の要望に副つてゐた。

しかし中共が一般中国人の支持を得てより民主的政治をなすに至つて後に、中共こそが中国民衆の大多数の政權であるにも拘らず、遅れた少数特權階級の旧政權を支持する事は歴史の進行に逆行してゐて、その敗れることは当然である。アジア植民地において欧米列強が、アジア諸民族の民族自覚に基く運動を抑へる一部特權階級の政權を支持し、内戦を戦はしめてゐることは誠に不幸である。日本がかつて國民政府の近代的中国統一を妨げ、反動的旧軍閥を助けた前車の轍を、アメリカが踏まざらんことを希望する。西欧はかゝるアジアの民族運動が共産主義と關連するが故にこれを弾圧する政策をとる。しかし問題はかゝる民族運動が



## 新春放談

### 不老長寿の辯

白川朋吉

新年はめでたくもあり、めでたくもなしという考え方もあるだろうが、紋切型でも、お互いが健康で新年を迎え、將來益々の発展をと、心から祝し合う喜びは又格別である。「人生七十古來稀なり」という言葉がある。とすれば、私など随分長壽の域を摩している訳であるが、それでも、新年ともなれば、甚だ愆深い話だが、まだまだこれからだという若々しい気持ちになるからいゝ気なものである。こんな事を云う方が新年のお目出たさよりもほどおめでたい人と笑われるかも知れない。

ところで、私が今日長壽を保ち得たのは何よりも元來健康であつたということもあるが、恒に終生かけた目的に情熱を燃やしてきたということが、私をして不老の氣概を培はしめたのだと自負している。はからずも、昨年理事長の職を汚すことになつたが、その最初の新年を迎えるに當つて、私の希いは

更に菊輪人壽を保ち得て関西大学の発展のために猷身的な努力を捧げたいとの一念のみである。幸にして、私のこの微力が何等かの形において寄與するところあれば不老長壽の齡を天與された甲斐があつたというものである。

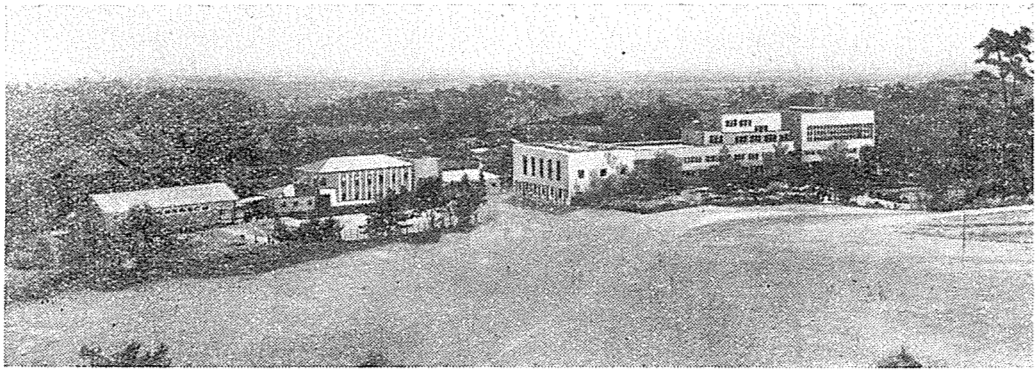
### 今年の希望

木村健助

わたくしは、この前に昭和十九年から二十年にかけて、学徒動員のあとの最も縮小された学部部長をつとめた。その当時は、学生はほとんどいなくなつて講義は全部やめになつたが、なお私立大学として若干数の教授を確保するために、政府の補助によつて研究所研究員という制度を設け、法文学部関係では岩崎教授と中谷教授の二人が研究員となつて学部教授を兼務することにになり、その外に専任の教授としてはわたくしただ一人が残つていたので、淋しい法文学部の残務を処理するという役目をさせられたのであつた。それから十年、今では充大な機構とな

つた新制大学の多忙な法文学部の仕事を再度しなければならぬことになつた。教授陣も専門部その他から移つてもらつて現在は専任講師を含めて十五人になり、やや意を強うしている。ふり返つてみて、無量の感概を禁じえない。しかし、今日の学部のこの盛況はまだ形の上において言えるだけであつて、内部の充実ということが極めて必要なのである。内部の充実のために、今年第一には学科課程の整備と学修指導の徹底をはかりたい。第二には教授陣の充実をしたい。これらのことはいずれも従來の学部長のやつてきた方針なのであるが、わたくしもこれを踏襲して一層具体化したと思う。たとえば、特に第二の教授陣の増強ということについては、教授や助教や専任講師や助手の数を増すということがもとより望ましいが、今年は少くとも三、四人の教授からは學位論文が提出されることを期待している。このことはむしろ形の上のことかも知れないが、内容充実の一つのあらわれといえるだろう。この外に、大学全体として各学部共通のことについては、いろいろの希望——学生の厚生補導の施設とか、教授の研究設備とかについて——があるが、これらのことの具体的なこととは別の機会にゆずりたい。いずれにしても、本学の古い傳統としての法文学部門に、巨きな一歩を進めること、これが今年のわたくしの希望である。





## 新なる政策を 求める

矢口孝次郎

年が更つたといつて今更新なる抱負などが湧いてくるわけではないが、政治の世界、殊に国際関係の上などにおいて指導的な政治家の会談がしきりと行われると何か知らず新なる展開が予感されて、やはり年の始めの新なる出発を意識せざるを得ない。さて本学に關してそのことを問われた場合、何と答へべきであろうか。私は昨年新評議員会・新理事会对する希望を学生新聞から求められた時、本学も今にして、新なる再出発をなさなければ、種々の面において徒らに膨大な量の集積のみが残る結果となるであろう、というようなことを答えておいたが、そのことは今なお感じているところである。然らば如何にして新なる出発をなすべきであろうか。私は本学の関係者、特に指導的立場にある理事会と教授会が種々の面において本学の現実を検討し、その上に立つて足を地につけた着実な然も進歩的な政策を樹立することが必要であると思う。着実な政策ということとは現実と妥協した政策とい

う意味でもなければ、まして傳統にのみ囚われた政策ということでもない。また一方進歩的な政策ということとは、現実と遊離した架空の構想を求めることでは決してない。かくして新たな政策が樹立された暁には、本学に關係ある凡ての人々は善意を以てそれを支持するであろうし、また支持しなければならぬであろう。

## 新春随想

上道直夫

今年除夜の鐘を私は寢床できくことができた。私としてはおだやかな迎春の姿なのかもしれない。いつの年か、それはラヂオのおくる名鐘の音であった。一昨年の除夜の鐘を、私は瀕死の愛犬とともにきいていた。ほのぼのと明けそめる元旦、裏の松林に私は彼を葬むるのであった。物心ともに生涯の最悪の年であったのだ。除夜の鐘をきくと、妻もそれをいうのである。去年も、そして今年もそうであった。よくも生きぬいてきたというのだろうか？ たくましい生活力を喜ぶべきなのか？ 一年ごとにそれでも新年は、いささかの希望もはらんで、なにか心あらたまる思いもする。独立の新春はとにかくも慶賀すべきにちがいない。しか

し前途の多事多難にいたつてはいくらまでもなく予測をたつものがあろう。さて関西大学も学校法人としての体制はほぼ確立された。「新年を迎えての抱負」という。けれど新理事会对する私の切望ということになりそうだ。要望はいくつかある。が先ず本年は何よりも学部それぞれの研究室を完備することだ。文学部についていえば、個人研究室といつたぜいたくな(?)ことはさしひかえるとしても、せめて少くとも各科に一室づつの研究室を必要とする。さらにこれらの研究室にはそれぞれの専門書が常備されなければならない。図書館の専門書を研究室へうつすことは早急には技術的にも困難を伴うかもしれないが、将来はぜひこれの實現を切に希望する。研究と教育指導の両面から見ればこれは欠くべからざる要素だからである。教育の面からいっても、研究室は教室の延長である。いな教室が研究室の延長かもしれない。研究室を中心とする教授と学生の接觸こそ最も要望されるべきものであろう。

私のことをいえば、私のシラー研究にせめてさらに一章はつけ加えたいものだし、所蔵の文獻焼失のために中絶していたハットマン劇を本年こそあらためて継続したいものだ。抱負などといえるかどうか。

# 新春雜感

鑄方貞亮

新年の抱負を書けよとのことであるが、とても筆者の手に負へそうも無い。著語家に學術講演をやれというに等しい。一年の計は元旦にありとは、古人もなかなかうまいことを言つたもの、だがこれを実行出来る人は余程非凡な類に属する。われわれ凡愚の輩には到底及びもつかぬ御託宣であつた。誰でもくだらぬ計画を好きこのんで立てはしない。筆者も生れてこのかた二度程元旦に計画をたてたことはあるが、御多分に洩れず、それは見事に失敗に終つた。爾來、鶴の真似をせぬ鳥をきめこんで現在に至つてゐる。何しろ、ここ二十数年間、大晦日から正月七日まで朝、風、晩、隨時酒を樂しむを年中行事と心得ている筆者である。まともな計画がたとう筈はない。そこで計画は正月と限らず、隨時立てることに決めてゐるが、これなら殆ど間違ひなく実行出来るから愉快である。何かやりたいと思ふときに、それをやるのであるから、余程のへまをやらかさぬかぎり思う通りになるのである。しかしこれをもつて満足してゐるわけでは

もない。何時かは何か素晴らしい仕事を、しかも計画的にやつてみようとは、かねがね思つてはゐるが、未だその時機が来ないらしいなど勝手な、そして極めてお目度無い空想を恣にしてゐるのである。だが、正直のところ、どうも西伯昌(周の武王の父)に見出され損ひの大公望になりかねない。外国人はいざ知らず、日本人はしよつち、ゆう先を急いであせつてゐるようだ。良くいへば万事に勤勉、熱心なのかも知れない。それとも時の觀念があまりにも發達しすぎているのだらうか。直ぐ年齢を気にして、あの人は何歳で何になつたとか、もう何歳になつたから何とかせにやならんとか、そのくせ、会の時間は別問題、マツカーサーから精神年齢満十二才だなどと言はれても、ああそうかいなあという顔を、つるりと撫でてにたりとする。どうも筆者の勝に落ちない。六十の手習、年齢を超越して思ふ仕事をしたいものである。

万事に勤勉、熱心なことは実に結構なこと、この美德にけちをつけようなどゆめゆめ思つたことは無いが、年から年中、四角四面几帳面、冗談は馬鹿のおしやべり、と心得ている御仁は兎角つき合ひにくいもの。阿呆なこと一つもしやべり、ぼんやり煙草をふかす時間も欲しいものである。これは決して無駄ではない。もし人類が目先のことにはばかり至極勤勉であつたなら、發明など起る筈は無いと見るのは筆者の僻目か。凡て便利なものを欲するのは經濟原則、最小の勞力で最大の効果をあげようという意欲の結果に他ならぬ。つまり發明家達はある意味で必ず不精者か怠け者であつたに違ひ無いと思ふのである。ラムブのホヤを磨くことが苦にならなければガス燈は發明されまい。ガス燈に火をマツチでつけることが苦にならなければ電燈も發明されまい。こういうとどうやら不精者や怠け者達こそ文明の母ということになりそうだ。怠け者を礼賛するに至つては全く話にならぬ。少なくとも教育者としては完全にアウトである。

## 關大商学部 建設の年

今西庄次郎

新年の意義が、新しい計画を立てその実現に向つて踏み出すところにあること、云う迄もない。従つて、昭和二十八年を迎えて商学部長としての抱負如何といふ質問に接するの、宜なるかなといふところである。併し我が商学部としては合憎そのような新しい計画は有ち合わさないのである。斯く云うと、如何にも發展の意氣込みがなく凡々と旧きを歩まんとしているが如くにも想わすであらう。けれども決してうそではないのである。一体、大学々の躍進と云い新しい計画と云う、それは出来上つてゐる大学、学部の話である。勉が、我が商学部は未だ完成されてゐないのである。つまり我が商学部としては新規計画どころでなく、自己の建設そのものをやり遂げなければならぬ段階にあるのである。

關大商学部は二十三年春關大が新制大学移行と共に發足したのであるが、当初学部の主体をなす教授陣は經濟学部其他から一部が割かれたに過ぎなかつた。それは専任教名という貧弱な内容であつた。勿論これは差当りの処置で、追々新しい教授を迎え一学部として恥かしからぬ陣容となす予定であつた。勉が、その後五年、僅かに河野教授の新任をみたのみで、一方正木教授が辭められたので差引き一名の増加もなく、そのままの状態に止まつたのである。幸い学生数は年々多きを加え、



入学志願者の増加により其の質もよくなり、学科々目も次第に整頓せられて来た。併し右の如き専任教授の寡少は結局外来講師を以て当てねばならず、皆も講師大学たるの觀を呈して来たのである。勿論借り物の先生中心では学部としての學風とか特色というふうなものが生まれて来る筈がない。

最近、學校法人関西大学の發足に伴い就任された新理事者の理解、商学部学生諸君の痛切な叫び等、教授陣建直しの条件は漸く備わらんとするに至つた。私共現任教授は、この機運に乗じ、自ら中核体となり、虚心坦懐、然も情熱的にその仕事を決行しようと思合せてのである。繰返して云うが、それは教授陣の強化とか充実という以上の意義を有つものであり、当に学部建設なのである。処で、この建設に対し一部の人は悲觀的な批評をなす。曰く「数年前ならば野に遺棄ありの流儀で未だ相当な学者を見出し得たであろうが、それらの人々が既に各大学に吸収せられた今日では、人を得ることは極めて困難である」と。併し乍ら吾々はこの点禍を転じて福となし度いとも考へているのである。というのは、既製品たる教授を輸入する代わりに、年少

新進の学徒を育成し潑刺たる教授陣をつくり上げる途を推し進めんとしているからである。

凡そ大学学部にして研究発表機關を有たぬものはない。然も我が商学部には従来此種の機關誌がなかつた。云う迄もなく、これはその教授陣が貧弱であつたからであり、その一つの現れである。併し今後上記の如く商学部の建設が進められるならば、自ら機關誌「商学論集」の獨立、発行は必然的とならざるを得ない筈である。

初めにも一言したように、吾々は現に孜孜として学部建設の仕事に携つており、学部の特徴を有たせんとする一歩進んだ計画論は後日に期している。併し新しい年を迎えて感想無きにも非ずである。否、他の学部の人々よりもより大きい、希望に満ちたものを有つている。蓋し学部建設事業の目鼻がつき始め、その実現への第一年たらしめ得ることが出来そうであるからである。尙、商学部建設は一応吾々の任務だとは云え、その達成は吾々の力のみでは不十分であり、関西大学各方面の好意ある支持がなければならぬ。ここに絶大なる御援助を心からお願ひして置く次第である。

(五百より)

西歐資本主義に対して何故かく共産主義化の方向を取るかを反省することが必要であらう。後進アジア民衆は非常に低い生活水準と貧窮の中にあり、その民族統一は長らく実現し得ず、その産業構造は遅れてゐるが故に、先進国資本主義の支配收奪を受けざるを得ない。だが先進国が遅れた諸国の機構を踏まへることによつて繁栄を達成するのでは困る。共産主義国とはいはず凡そ集産主義は遅れた国々が、かゝる状態に抵抗し、自國を急速に高度な産業構造に高める為、人民の自由を統制束縛する性格を持つけれども近代的自由を知ること少き後進国の民衆はその不自由を西歐人程不自由とは思はず、これらが西歐に從はぬ所以である。

アメリカは一九五二年度に有史以来未曾有の繁栄を謳歌した。しかしその繁栄の基底は、アメリカに繁栄をもたらす資本主義の機構に反逆する東歐、極東その他の民衆との冷戦の為の老大な軍需によつて形成されているのであり、その繁栄こそは著しい自己矛盾を孕んでゐる。もちろんアメリカもかゝるアジア、アフリカ等の後進民族の反抗運動の重大性を理解し、その歴史学人類学的研究を進めてゐる。コロンビア大学人類学教授ラルフ・リントンはその編輯にかゝる論文集「Most of the World, The Peoples of Africa, Latin America and the East Today, 1949」の緒論で「ヨーロッパ

バ外民族の人類学的研究が今ほど緊要な時代はない故にこの書を編むと述べた。その理由はアジアの植民地の民衆が欧米本国支配より反抗脱離せんとする現状において、支配ではなく協力を樹立することを手段とするが、しかし従来維持してきたヨーロッパのヘゲモニーによつて得た利益を今後如何にして維持するかその研究の爲であるといつてゐる。

(pp. 9-10) 今日のヨーロッパ乃至アメリカの極東政策がかゝるヘゲモニーの利益を維持せんとする政策と機構に問題がある。またアジア民衆の協力を得んとするならばそのやり方が問題である。今日のそれにおいてはアジア民衆の望む方向が真に理解されて居るといへるであらうか。その協力を得る方向に進んで居るであらうか。私はそこに疑問を感じざるを得ない。例へば「アジア人をしてアジア人と戦はしめる」といふが如き言葉は最も理解に欠けた言葉であるといはねばならぬ。勿論アジアも彼に協力の手を差のべなければならぬであらう。しかしそれには互に理解し合うことが必要でありそれには歴史的にその交渉の展開過程を顧ることが必要である。ここにペルリが友好的にわが開國の機縁の第一歩を印してより百年記念にあたる年に、我々も改めて歴史を反省し相互理解を深めることは、今後の世界平和の実現に意義あることであると思ふ。(文学部教授)

# 東洋のTAO

渡辺格司

このごろレックス・ワーナーとか、キリヤム・サンゾムなどが英文学でカフカ主義なるものを標榜しているそうである。フランスでは超現実派の人々はカフカを自己の陣営に引き入れようとしているし、実存主義の人々はカフカは実存主義の源流だと主張している。手法から見れば、カフカはシュールレアリズムである

うが、カフカの意義は手法にあるのではない。もつともカフカの実存主義はサルトル派とはちがった立場に立っていて、私にはトルストイアンとしてのカフカという一面が最も興味をひくのである。カフカに就いての研究は、ドイツではリルケを凌ぐほど沢山に出ているそうであるが、何故か日本にはまだ数種しか来ていないようである。昨年はノイエ・ランドシャウ誌がカフカ特輯を出してカフカ・ブームに参加したほか、カフカ全集がドイツとアメリカとで同時に出版され、まだ完結していない。

カフカが病死したのは一九二四年だから、一世代も前のことだ。死後三十年もたつてから世界の注目を浴びるといふのは、よくよくの事情がなくてはならない。カフカとその一族が惨めな目にあつたという事情、カフカの作品がうけた迫害などの外に、私はドイツの人々、西欧の人々の不安な生活をも勘定に入れてよ

うと思う。昨年中ドイツの文芸新聞を購読してみて、私はいくらが今のドイツ人の考えていることが解つた

ように思うので、私は私なりに考えついたことを述べて見たい。要するに、ドイツも日本と同じく、過去への関係に於て絶望していると私は解釈している。

カフカもそうである如く、ヘッセもそうなのだ。押しなべてドイツ人は絶望している。現在に絶望し、将来に絶望し（ていると彼らは思っているが、実は）過去へ向つて絶望しているのである。現在と将来とが、あまりにも大きな困難として眼前に横たわつて来ないために、過去への関係がはつきり意識にはいつて来ないだけなのだ。たとへば、ゲーテ研究にしても、ゲーテの傳記を書くとなれば、ゲーテの外面しか描かない。また近くはゲーテと題して自己を描いているに過ぎぬ。そして抽象化され、精神化されたゲーテ論がつづいて出てくる。なぜゲーテの人間の中へはいつて行かないのか。ゲーテが時として失意の人のように悄然としていたことがあるとか、ゲーテが人に接するとき棒をのんだような姿勢をしていたとか、そうした傳記家の叙述のうらにある人間の内的運命について、何故ドイツ人は探ろうとしないのか。人間の内的生命が生活して行つた道と行くべきであつた道、それらの分裂から生じてくる歎息は、ゲーテの詩の行間にただよつてくるように思う。私はそういうゲーテを探究したいし、それをドイツ人に勧めたい。そうしたならばドイツ人はゲーテに「救い」を見出しうるのではないだろうか

か。廣く言つて、古典への関係においてドイツ人は考へ直すのがよからう。不確かな関係の意識が、却つて現代ドイツの不安の真因ではないだろうか。

まことに、生きてゆくためには、将来を自分でつuckingて行くために、人間は手段を探究しなければならぬ。生活の探究は、混沌期の一つの課題である。その場合、有力な補助手段は「過去」なのだ。過去に信頼をおけばこそ、私たちは将来に対して恐れなくて済む。明日になつて自己を主張する道TAOは、昨日が興えてくれたものだ。将来とは、言わば、眼前にひろがつている海の水平線である。過去とは、私たちが背にして立つている陸地である。青年が前途洋々と思つのは、昨日の道を明日に施しうると信頼しているからこそである。青年が昨日に、今日に幻滅を味わうならば、明日の夢がない、と叫ぶであろう。ところが陸地はいま忽焉と、或は、徐々に陥没したではないか。私たちは過去の（文化の）後継者だと信じていたのに、いまその遺産を失つてしまつたのだ。私たちは、波をかぶつて沈んでしまわなためには、腕の限り泳がなくてはならぬ。溺死しないための腕の懸命な運動が文化の創造なのだ。私たちが有機体は、生命の危機にぞめば、贅肉や脂肪をふりすてて神経と筋肉とにまで縮まつてしまふ。それが「救い」なのだ。ドイツもいまやその本質的なものへと収縮し、瘦せたのである。瘦せることの中に「救い」が見出されなくてはならぬ。本質的なものへ瘦せることは健康なあらわれである。ドイツ人にとつては今や過去にエネルギー源を求めるか、それとも異質な文化にそれを見出してエネルギーの補給をするか、二者択一の状態にある。しかし過去にエネルギー源を見出すとするには、ドイツ人はあまりに過去への関係において絶望してしまつた。彼ら

はあまりに性急に絶望したのではないかと私は思う。しかしドイツ人は改めて古典への探究を再開しはじめたとも考えられる。昨年から始められた古典文献の翻刻の凄じい勢はその証拠と言えりかも知れぬ。しかも一方には異質なる文化——東洋の道——が一つの「救い」として提唱されているのである。ヘッセにしては、カフカにしても、何と東洋的な作家であることよ、と私は言いたい。カフカの「審判」の中では支那の「聖賢の道」が人間生活の中心に置かれていないではないか。カフカによれば、結婚は人間のな、宇宙的なゲマインシャフトへの編入だと考えられている。従つて、愛情のない孤独な生活は人間として悪徳である。ヘッセの「悉達多」や「東洋の旅」については改めて述べる筈もないが、ヘッセの「書簡集」を読んで見ると一九三四年の夏はヘッセが呂不韋の「春秋」を讀んで最も深い感銘をうけた年であると思え、随処に呂氏春秋からの引用を行っている。東洋への傾倒ならば、ドイツ浪漫派やゲーテの晩年にも見出されるが、その東洋への傾倒と現代の東洋の道との間は大きな距離がある。かつての場合が多かれ少かれ逃避であり、憧憬であつたのだが、現代の場合には「到着」なのである。しかもカフカの「到着」なのだ。即ち西歐の人は東洋の道に到着したのだが、東洋の中へ入れないのだ。カフカの小説「城」に於て、主人公が城の前まで来て、城の中へ入れないと似ている。だから、私は東洋の道が西歐の人にとつて「救い」であるという主張に対しては懐疑的なのである。西歐の人は悩みの果てに東洋に到着したが、城の中に安住することは起きる来ないと思う。西歐の人は東洋の城の前における異邦人であるだろう。だから、西歐の人は彼ら自身の過去への関係において改めて親しみをもち、過去への信頼を見出さなくては行けない。

ドイツの新聞に出ていた記事を思い出して見ると、生活のあり方が西洋人と東洋人とは異つているが、

真剣な意味をもつて困難をふみ越えて行けば、西洋人としても東洋人の道を行くことが出来ると楽観している。それらは東洋に滞在した人々の見解である。ただ道を辿つて行つて到達する「熟達」なるものが、西洋と東洋とは異つているのであり、西洋人の眼から見れば、東洋の道は「修練」UEBUNG だと言うのである。戦前に日本に来て弓道から東洋の道に悟入したヘルマン・ヘリゲル氏などは、こうした見解の代表者である。ヘリゲル氏は哲学者であるだけに、禪を通じて弓道の「こころ」を悟り、弓道を通じて禪の道に通じた人である。だから「レルネン」と日本の「習う」とは大いに異つていて、日本で弓を習うというのは、スポーツを行うときのように、よいレコードを作るために熟達するというのではなく、弓を射るといふことは目的ではない、自分の「我」の中にある障碍を「修練」によつて克服する手段として弓を習うのだ、と説いている。六年間に亘るヘリゲルの弓の修業は、矢を射るにあつてという考えを排し、的のことも考えず、弓矢のことも考えず、技巧も技術もする修練であつた。要するに、弓道に於ては射ることが問題でなく、内的な「こころ」の持ち方が問題なのである。達人たることは、心の動揺とか外的の事情とかに左右されないように修練することである。従つて、弓を射るのは「我」ではなくて、竹の葉に積つた雪がある重さになると、竹の葉の雪がはねかえす「あれ」が弓を射ることなのだ。

この点に東洋の道がある。「我」が「あれ」に融け入る境地である。涅槃ニルヴァーナの境地が修練の目的の地である。閑寂な境地も、熟達の域も、所詮はここに到達される。剣道の極意が生死に心を煩はざれざるに在る如く、日本画の至境が技なき技にあると等しい。囲碁將棋といえども道はここにある。湯茶の道も生花の道もそうなのだ。デュルクハイム伯は日本に来たとき、或る老人から「宗教的な意義を得んがために

は、簡単であつて繰返しうるものでなくてはならぬ」と聞いて、これこそ東洋の道の神祕をひらく鍵だと思つたのである。一回的ではなくて繰返されるものが宗教的な意義をもつ世界でなくては、修練によつて内的な「こころ」の持ち方の熟達に到ることは出来ない。繰返すということは時間を超越しているから、時間に対する関係に於ては西歐とは異つた関係に立つていつまり世界に於ける人間の位置といふことを考へても、神に対する関係について考へても、西洋と東洋とは根本的に異つていではないか。西歐では、神は形式的には唯一者として考えられ、しかも繰り返えされない一回性である。神の恩寵とか創造について見ても、西洋の一回性である。そんなことは神学に属すると言ふ勿れである。それは西洋人の生活感情になつているのである。西洋人は樹木の中にも一つの生命を見るばかりでなく、二柄の葉、二輪の花もまつたく互に同一であると見る。それらが法則性の中に個性をもつていとは考えないようにする。そこに修練をつみ重ねた達人といふものゝ存在しにくい理由がある。西歐の人は熟達できないのではなくて、熟達なんてことに意味を見出さず、従つて価値を置こうとしないのだ。

ドイツの新聞に散見された東洋の道は、困難にも拘らず克服されて行き、やがて生まれてゆく西歐の文化に吸収され得るものとしていられる。ヘッセの考えもそれに近い。しかし、カフカの考えは否定的であり、ペンミステイツシュである。西歐はますます東洋の道に近づいてあろう。しかし現実にはそれを許さない。現実の歯車は苛酷であつて、それは如何ともなし難い冷たい機械的なものを以て進んでゆく。それを書いたのが小説「アメリカ」であると思う。私たちは現代日本の立場から東洋の道を考え、自分の生活を組み立てて行く必要がありはしないだろうか。

(員外教授)

# 學内報

## 關西四大學長懇談会

旧暦十三日、本学千里山学舎大学ホールに於いて同志社、立命館、関西学院大学及び本学の学長並びに関係者出席して開催。本学白川理事長、岡野学長の挨拶について田畑同志社学長より私立大学連盟総会並に協議事項について報告あり、其の他関係事項についての意見交換を行い散会した。次回は一月二十八日立命館大学にて行われる予定。

## 海外派遣留學生要綱決る

さきほどその原案を得た海外派遣留學生に関する「関西大学在外研究員規程」が、このほど正式に決定を見、愈々本年四月一日より実施されることになった。研究員は本学関係教職員中より学長の諒解推薦、教授会の承認を経て理事会が之を任命し、専攻学術の研究を主とする研究員と（在外一ケ年）、視察研究を主とする研究員（在外六ケ月）の二種に区分される。尙研究員の在外中必要な経費は一切支給される。

## 訃報

吉木一朗氏（本学短期大学部教授）  
旧暦三十日自宅に於いて逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

同氏は東京帝国大学工科大学機械工科学卒業、大阪高等工業学校教授、大阪帝国大学学生課長を歴任、昭和十九年関西工業専門学校校長、二十六年本学短期大学部教授に就任現在に至った。

## 校友

### 桃源会（千里山昭和十五年出身同期生会）

昭和十五年春、長き学舎生活を終え、社会に第一歩を印した時に第一回の例会を心齋橋森永にて開催、すでに十有三年経ちその間、就職いくばもなくして軍隊生活、戦争の余暇に結婚子女の出生、戦災、敗戦、インフレ、そして今や官界に実業界に、教職その他の分野に中堅として活躍し始めたのであり吾々の今後こそ期して待つところ大なるものがあろうと思はれる。この意味に於て、一夕、久方ぶりに旧交を温めるべく旧暦二日午後六時より戎橋平和園に於て恩師岩崎、中谷、木村、三先生の御臨席を仰いで懇親会を催した。卒業以来初めて顔を会はせる者もあり三十名の多きに亘る参集者、三先生の懐しき声を聞いては学生時代に隔つた錯覚に千里山時代を追憶。母校の現状を拝聴、会員各自の近況、自己紹介を終えて記念撮影の後思い出の学歌を高唱して盛會裡に散会した。尙、同期生から岩本公夫氏が母校評議員に当選された

事を追記して置きます。亦同氏の盡力により同期生の名簿も出来上りました。当日の出席者左記の通り。



（三先生を聞いて）

- 岩崎教授、木村教授、中谷教授  
石丸重元、大沢寛之進、大橋米、大峰正雄、小林文雄、白井種雄、曾我昭文、寺部清毅、藤井藤三郎、奥山哲（旧姓藤田）、吉田良顯、富永重紀、谷光倫、奥村昭、岩本公夫、岡崎繁、千田茂治、荒井安彦、小前典夫、橋本禮治、貝市正、芝野淳、小川喜志雄、北村常雄、丸谷紀芳、森田喜久雄、壽嶺新三（貝市正、岩井公夫并前氏代）

## 尼岐支部総会

尼岐支部では旧暦六日午後五時より尼崎商工会議所に於て二十七年秋季総会



を開催、当日は支部長松尾高一氏が尼崎信用金庫理事長として多年庶民金融に盡力されたる功勞により録授褒章を受與され亦、母校評議員に当選された事、副支部長西村治三郎氏が母校評議員、更に役員として監事に当選せられた事、岩本公夫氏が母校評議員に最年少者として選ばれた事等の祝賀を兼ねて盛大に行はれた。尙母校よりは岡野学長、新任の久井専務理事、宇佐美理事、森川理事（教授）西尾監事も来賓として参会され各氏より母校の近況、將來の抱負等を拝聴し更に出席者前代議士吉田吉太郎氏より順次自己紹介をなし、記念撮影の後副支部長西村治三郎氏の発声で関西大学万歳を唱和し盛會裡に終つた。当日の出席者左の通り  
大學側 岡野学長、久井専務理事、森

支部

川理事、宇佐美理事、西尾監事  
松尾高一、西村治三郎、須佐  
美入藏、吉田吉太郎、山野田  
重治、松永三郎、杉田兵作、  
前田豊治、阪上正己、中谷芳  
之介、齋藤忠雄、生橋忠三郎  
近藤新次郎、中塚薫、淺山敬  
夫、天野平一、佐藤匡、小林  
弘昌、丸谷実、西村末治、柴  
田静雄、沢田嘉貞、富田輝穂  
菅野友太郎、沢山政康、西村  
富夫、梶原大平福、井沢義男



(神戸支部総会)

神戸支部定時総会

植田弘、伊藤順一、岩本公夫  
(西村治三郎、岩本公夫氏代)

歳末押しつまつた十二月十三日午後四時より神戸支部では忘年会を兼ねて昭和二十七年年度の定時総会を山手北京樓に於て開催した。母校より岡野学長、森川教授、矢野常務監事、平井学生課長の出席を得、又支部会員三十八名の多数参加があつて盛会を極めた。先づ向井副支部長の開会の挨拶に始まり角田支部長の挨拶があつて矢野常務監事より母校内外の近況報告あり次いで岡野学長及び森川教授より挨拶を兼ねて大学経営の方針に就て説明せられ更に来春卒業する学生の就職斡旋の依頼等があつた。向井副支部長より過般施行せられた評議員選挙の経緯及び結果報告並びに支部の現況報告を行つた。角田支部長より緊急動議として故入島教授の子女育英資金募集の提案をした処多数の賛同者続出し可成りの拠金に達した。一応議事を終り小憩、一同記念撮影の後宴会に移り出席者夫々自己紹介を行い和気満場に溢れ午後八時学歌斉唱母校及び支部の発展を祈念して万歳を三唱盛会裡に散会した。尙当日の出席者は左の通り(順不同敬称略)

大學側

岡野学長、森川教授、矢野常務監事  
平井学生課長

支部側

角田好太郎、山崎敬義、土井美弘、  
星野正身、片山菊治郎、向井裕亮、  
岡田退一、中藤幸太郎、岩本信正、  
下条小野右衛門、森知巳、多賀恒一  
徳永武、今岡琢磨、松島與嘉三、貴  
答喜作、渡辺道男、吉田貞澄、吉田

正幸、橋本太一、森又雄、猪熊和男  
広瀬義臣、来間孝、横谷詢一、中野  
正喜、今村博、西榮久、木村功、戸  
田重喜、大西忠三郎、田中幸治、中  
宮正喜、石見正徳、中橋徳藏、梁瀬  
耕藏、阿佐美久雄、黒田邦彦 以上  
(向井裕亮氏報)

學生

敢闘譜つゞく

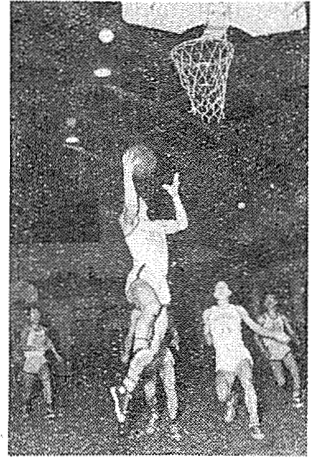
どう戦う全関西 全日本  
バスケット

◎二部學友会文化祭 十二月十四日大手前会館に於いて、二部學友会第五回文化祭が開催された、本年も暖冬好天に恵まれ、午前十時より開幕されたが、多数の学友父兄の来場を得て盛況裡に行事が進められた。先づ副執行委員長平井の開会の辞に続き、応援團の学歌斉唱に大会の幕が切つて落され、立野、井口、山口等の軽音楽、ハワイアンバンドの異国情緒豊かな音楽に客足を集め、文藝部、劇研部員による放送劇「都廳」学生課次田原作並に演出、部長宇佐美舞臺、辻村、芦田上田、手塚の熱演は科白だけのものではあつたが、都会にドン底生活をする者等の哀愁を傳えた、次は吟詠部員による吟咏、朗々たる熱声が場内に響く、土屋、山中、山田等の諸君の出演であつた、舞台が変ると、社会科学研究部の劇乞食の歌が上演された、部員の共同演出によ

り、前田、岩田、本田、等の出演であつたが声が小さく科白が通らなかつたので折角の劇も退屈なものにしてしまつた。この頃から漸く会場もすつかり埋めつくされ、続いて、中垣学現作のシヨウの型式で体育部各部紹介が行はれた。応援團員諸君が女学生に扮し各部練習場を巡りながら、部活動を紹介するのであるが、笑わせながら、各体育部の内容をよく父兄の前に公開した、フエンシング部、空手部の基本動作、実戦の型の紹介、拳斗部の模擬試合、撓撃技部の剣道の型、水泳部、スキー部、山岳部、をコメデーに仕組んで紹介した。特別出演として志賀山流の華麗優雅な日本舞踊があり、グリークラブの男声合唱、ドイツ民謡別れ他四曲、成蹊女大生との混声合唱と殿様他一曲の発表があつて、執行委員長藤岡の挨拶、山田学生部長の挨拶、石井後援会長の祝辞あり、午後のプログラムに入







ダブルス決勝本学

多田寺口2 (1515 | 6) 0 小林岡本奈 (良)

◎バスケット部 第二十八回全日本バスケット選手権大会が一月二十一日より五日間、東京メモリアル・ホール、明大体育館の両所で挙行政せられるが、全国より実業界、大学等の優秀チームが集結する本大会に、本学は、本年はOBの北野、猿蓑を加え、オール関大として出場、Aゾーン第一戦には、全愛知と戦うが順調に行けば、全日学生選手権の覇者立教大と準々決勝で対戦することになる、本大会に於いても優勝候補の第一に挙げられている立教大であるから、名手G北野を加えた本学が、どこまで戦うかに試合の興味が懸けられている、全日学生選手権のように、勝っている試合を最後の五分間で失なうようなことのないよう期待したい。(寫眞は秋季リーグは於ける本学(の活躍シユートするのはC中井)

◎アイス・ホッケー部 全日学生選手権

大会が一月一日より挙行政され、本学も参加、チーム結成三年目で、メンバー編成技術等にまだまだ不足するものがあるが昨年の本大会参加当時に較べると一段と進歩を示しているとは云え東北大に第一戦で敗れた。

本学 1 (10) 0  
0 1 1 1 1  
3 東北大

一月二十七日より三日間、大阪スケート場で関西学生氷上選手権大会が挙行政せられるが、本学は第一日同大、第三日関学大と対戦する、出場メンバーは次の通りである。

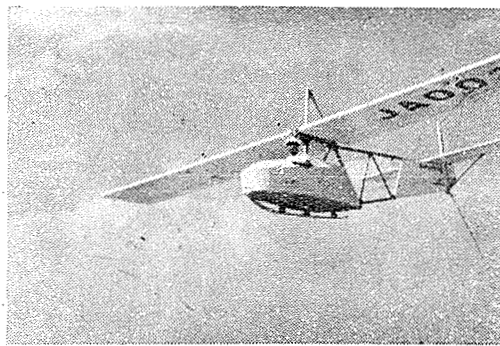
沢山口野島村 西浦 浦  
福沢山小見野 中宮 大  
FW DF GK

◎スキー部 第二十三回関西学生選手権大会が一月八日より三日生スキー間挙行政せられ、本学は六年連覇を遂げた、入賞種目、入賞者は次の通りである。

総得点 本学七一点 同大四三三點 関学大二二點

耐久三十二キロ 一位北林 二時間二十六分五十八秒 二位加藤 二時間二十七分二十秒 三位飯坂 四位稻石  
長距離十六キロ 一位後藤 一時間五十分十四秒 三位尾上 一時間十三分五秒 四位鈴木

復合 二位富井 四四二點 三位日景 四三四點 五位鈴木 六位藤沢  
飛躍 富井 不倒最長距離 五十米  
リレー 北林、加藤、上野、後藤  
一位 一時間五十一分二十一秒



(プラ・ヒコ沿空一航空部)

第二五五號 目次

卷頭言……………岡野留次郎 (2)  
開國百年記念に際して……………  
……………横田健一 (3)  
新春放談…………… (6)  
学内報、校友…………… (10)  
学生…………… (11)  
編集後記

【編集後記】

◇謹賀新年後れ乍ら御挨拶申上ます  
◇年末年始御多忙中にも拘らず多数の御投稿を戴き編集子感謝の至り、紙面の都合で掲載が前後になり心苦しい限りです。御賢察の程を。

◇学報内容充実の為色々計画をして居ります。御手数乍ら、問合せ、御依頼等に御協力下されば幸甚に存じます。

◇表紙写真又須古勝次氏を煩らわしました。学内外からの御支援を此の上ともお願い致します。

昭和二十八年一月十日印刷  
昭和二十八年一月十五日發行

関西大學學報 第二五五號

一年誌代実費三〇〇円(送料共)  
大阪市大淀區長柄中通丁目二番地  
福業堂 松 和 夫  
發行人 松 和 夫  
大阪市北區川崎町七  
印刷所 西 井 幾 藏  
大阪市北區川崎町三七  
印刷所 株式会社 ナニワ印刷所  
電話掛川三三〇二番  
電話掛川三三九三番

發行所 関西大學學報局  
大阪市大淀區長柄中通二丁目  
電話掛川(局)一七五六番  
電話掛川(局)二六七七番

# 關西大學學生募集

## 大學院

法学研究科—公法專攻・私法專攻 六〇名  
 文学研究科—英文学專攻・国文学專攻・哲学專攻・史学專攻 六〇名  
 経済学研究科—経済学專攻 五〇名  
 (修士課程)

出願期間 三月一日—四月八日 試験期日 四月十日・十一日  
 博士課程は修正課程に準ずる

## 學部

法学部	第一部(昼)	一年	四〇〇名	三年	若干名
	第二部(夜)	一年	三〇〇名	三年	若干名
文学部	第一部(昼)	一年	二〇〇名	三年	若干名
	第二部(夜)	一年	一五〇名	三年	若干名
経済学部	第一部(昼)	一年	四〇〇名	三年	若干名
	第二部(夜)	一年	三〇〇名	三年	若干名
商学部	第一部(昼)	一年	二〇〇名	三年	若干名
	第二部(夜)	一年	一五〇名	三年	若干名

### 出願期間

第一部 法・文学部 一年 二月二日—三月九日 三年 三月二日—三月廿四日  
 第二部 法・文・経・商学部 一年 二月二日—三月廿三日 三年 三月二日—三月廿四日  
 (日曜、祝日を除き毎日午前十時より午後四時迄)

### 試験期日

第一部 法・文学部 一年 三月一四日 三年 三月廿七日  
 第二部 法・文・経・商・学部 一年 三月十二日 三年 三月廿五日 三月 三月廿七日

## 短期大學部

商工経営部 (第一部(昼) 二〇〇名  
 第二部(夜) 二〇〇名)

出願期間 第一、二部とも二月二日—三月廿三日 試験期日 第一、二部とも三月廿四日

◎入学要覽 五十田小切手同封の上所在地に申込の事

大阪府吹田市千里山 電話吹田123.461

大阪市淀区長柄中通 電話堀川1756・2072—3・3332

大學院・學部

短期大學部